Awara News

あわらニュース vol.98

令和４年８月１日発行

「多くの人の笑顔のために」

- 重症心身障がい、難病、長寿医療を柱とし、地域に密着した専門医療を提供します。
- 社会的なアプローチを組み入れ、患者中心の心あたたまる医療を実施します。
- 臨床研究、教育研修、安全管理をとおして、常により質の高い医療を追求します。
- 公益性を確保し、効率的で自立した病院経営を推進します。

病棟の七夕のかざり

最近の医薬品の話題

薬剤科長
木村 麻子

昨年の10月に当院に赴任して、初めての福井県生活を送っています。たまに日帰りで温泉を楽しみつつ、最近は病院の近くでクマの目撃情報があったので、クマに警戒しながら過ごしています。人生でクマに警戒する日が来るなんて!?驚きです。

さて、薬剤科の業務に目を向けてみると、ここ1, 2年はCOVID-19と医薬品の供給不足に振り回されています。COVID-19関係ではワクチンの調製も業務として定着し、治療薬も使用できるように整い、薬剤科内の状況は当初よりは落ち着いています。

しかし医薬品の供給問題についてはまだ、供給が不安定だったり停止したりするものがあります。その都度、患者さんの治療に影響がないように薬の確保に努めていますが、なかなか手に入らないものもあり、さらに業務の時間も取られて悩ましいところです。この問題は製薬企業の製造管理等の不備による処分を発端としていますが、その背景には薬価を引き下げてきた政策があり、闇が深いと思っています。薬の安全を担保し、安定供給されるという当たり前の状況に早くなってほしいと願うばかりです。

骨髄異形成症候群

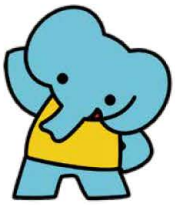
血液腫瘍内科医長　大槻 希美

昨年度は3部構成で血液の腫瘍疾患について書きました。今年度はそこで述べなかった血液疾患について書いていく予定とします。骨髄異形成症候群は造血系が異常クローンに変わる後天性の造血障害です。無効造血のため成熟血球を末梢へ供給できず貧血、血小板減少、白血球減少などの骨髄不全を来たします。また、前白血病状態でもあるため急性骨髄性白血病へ進展することのある疾患です。中高年齢者に多く罹患率は10万人あたり男性3.8人、女性2.4人で加齢とともに罹患率が高くなっています。発症も近年増加傾向が認められており、数年にわたって高齢者の貧血や血小板減少を指摘されていた方で診断がなされる例を経験します。予後については国際予後スコアリングシステムがあり、そこにあてはめて予測し、リスクと全身状態を見て治療を行います。メチル化阻害薬が出てから同種造血幹細胞移植が対象とならない人への支持療法以外の治療法が一つ増えています。

認知症の経過

老年科長　桒田 敦

皆さん認知症に対してどのようなイメージをお持ちでしょうか？一般的には「物忘れがひどくなる病気」といったところでしょうか。これは脳の神経細胞がダメージを受けてどんどん脱落していくことによっておこってくる症状です。つまり認知症は脳の機能が低下していって今まで出来ていたことができなくなる病気です。残念なことに現時点では根本的な治療法がなく、進行の速度を遅くするのが精一杯です。個人差はありますが治療を全く行わなかった場合、認知症が発症して4年程度は物忘れが主体で電気製品の使用や車の運転、仕事、調理に支障をきたすようになります。4～7年たつと着替えや入浴もできなくなり、会話も困難になってしまいます。さらに進むと歩けなくなり、排泄もオムツになってしまい、食事をむせて食べられなくなってしまい、肺炎をおこすようになり10年程度で亡くなってしまうことが知られています。このように認知症は死亡につながる非常に怖い病気です。なので早期に発見して、治療により進行を少しでも遅くして、進んでしまった時のために備えておくのが大切です。



子どもの健診

小児科医長　大坂 陽子

日本では母子保健法に基づき、市町村が生後3～4か月、1歳半、3歳の乳幼児に公的健診を行っています。6か月や10か月、5歳などにも健診の機会を設ける自治体もあります。自治体の集団健診では多職種（医師、保健師、歯科医師、自治体によっては心理士、管理栄養士など）が関わり、子どもを中心に地域での繋がりを作るようにしています。また、医療機関での個別健診やこども園での健診、検尿などの情報も非常に有意義です。あわら病院も自治体の乳幼児健診や発達相談に協力しています。

健診の目的は疾患の早期発見のほか、健診時の年齢で見つかりやすい身体的精神的な問題のチェック、家族の不安に耳を傾けることなどです。しかし実際の健診の時間は限られ、コロナ禍の制限もあり、過剰診断や見落としの可能性は否めません。気になる場合は医療機関の受診、保健師による経過観察、心理士への相談などをすすめますが、乳幼児期の個人差もあるので過度に不安を感じる必要はありません。

最近は発達障害のスクリーニングとしても健診が重要になっています。健診で気になった場合、早期に療育などに繋げることで、子どもや家族のストレスが軽減します。あわら病院も心理相談や言語療法を行っており、今後も地域の皆さんの力になれるよう努めていこうと思います。

地域医療連携施設のご紹介

あわら病院と連携している医療機関等をご紹介します

医療法人 恵仁会 柴田医院／社会福祉法人 緑進会 地域密着型特別養護老人ホーム 湯の町メロン苑

芦原温泉の風情溢れる温泉街に位置する当施設は、平成20年に開設し、今年で14年目を迎えました。『人として生きる』を法人理念に掲げ、全室個室により入居者一人ひとりの個性や生活リズムに対応するユニットケアを実施しているほか、浴場には源泉かけ流しのお湯を使用しており利用者の皆様に楽しんで頂いております。また、地域のこども園や団体との交流行事や、認知症カフェ「メロンカフェ」を毎月開催するなど、地域に根ざし、地域に開放された施設作りを目指しています。また併設の認知症対応型デイサービスでは、認知症進行予防に特化した、利用者一人ひとりに合わせた少人数制でのケアを実施しています。

入居者の健康管理においては、経管栄養、吸痰等の医療行為や継続的な医学的管理が必要な入居者が増えてきており、今後ますます医療介護の連携が重要となっております。嘱託医の柴田恒夫医師の他、協力病院のあわら病院様をはじめとした地域医療機関のご支援を賜りながら、今後も入居者の健康と生活を支え、地域福祉への貢献に努めて参ります。

医療法人 恵仁会 柴田医院／
社会福祉法人 緑進会 地域密着型特別養護老人ホーム　湯の町メロン苑

〒910-4103 福井県あわら市二面42-20
TEL (0776) 77-1288　FAX (0776) 77-1289
メール meron-en@po.hitwave.or.jp　ホームページ https://www.meron-en.or.jp

地域医療連携室便り～神経難病レスパイト入院～

医療社会事業専門員　新谷 裕子

あわら病院では神経難病の患者さんのレスパイト入院の受入れを行っています。レスパイト入院は人工呼吸器や吸引等、医療的な管理を必要とする神経難病の患者さんとそのご家族のための入院です。在宅主治医の先生や在宅のサービス事業所と連携のうえ、ご家族の介護負担を少しでも軽減し、よりよい在宅療養生活につながればと考えています。

利用希望の際は、ケアマネジャーさんを通じてご相談いただくことがほとんどですが、お電話で地域医療連携室ソーシャルワーカーまで「レスパイト入院について」と、お問い合わせいただければ、受入れまでの手順について説明をさせていただきます。そして、在宅での療養環境や状態をお伺いいたします。診療情報提供書と、日常生活動作について所定の用紙にて確認させていただき、お受入れについて検討の上、日程調整をいたします。

日程が決まりましたら、持ち物や費用についてご家族の方に説明させていただきます。当院の療養環境を知っていただき、環境の変化による不安を少しでも軽減できるよう、それぞれの患者さんに合ったコミュニケーション方法で、少しでもご自宅に近い環境で安心してお過ごしいただけたらと考えています。

利用状況に関しては当院のブログでも確認することができます。短期間の体験レスパイト入院もありますので、まずはお気軽に地域医療連携室ソーシャルワーカーまでお問い合わせください。

外来担当医表

（令和4年8月1日現在）

診療科		月	火	水	木	金
総合	内科	見附 保彦	見附 保彦	大槻 希美	鈴木 友輔(第1・2・3・5) 見附 保彦(第4)	伊藤 和広
	小児科	川満 徹 ＊	川満 徹 ＊	川満 徹 ＊	有賀 譲(第1・3・5)＊ 湯浅 光織(第2・4) ＊	川満 徹 ＊
専門	リウマチ		津谷 寛		津谷 寛	
	血液・腫瘍			浦崎 芳正 ＊		大槻 希美(第2・4)
	生活習慣病			鈴木 友輔(第2・4)		
	老年					桒田 敦(第1・3・5)
	神経			眞田采也加(第1・3・5)		
	循環器			見附 保彦	見附 保彦	
	外科	齊藤 貢	齊藤 貢	齊藤 貢	齊藤 貢	齊藤 貢
	整形外科	谷中 惇				
	眼科				吉岡 達也 ＊	
	皮膚科		若原 真美 ＊			
	地域ケア	鈴木 友輔 ＊				
	禁煙外来	見附 保彦				

● 受付時間（午前診療）8:40～11:30　● 黄色枠は予約制　● ＊印は午後診察　● 休診日／土・日・祝日・年末年始

※皮膚科の診察は、火曜日の13:00～15:00（受付時間14:30まで）です。

※神経内科の診察は、第1・3・5水曜日（受付時間8:40～11:30）です。

※最新の医療体制についてはあわら病院ブログ「診療体制の最新情報」をご覧ください。

感染防止対策室便り

ICD　伊藤 和広

世界保健機関（WHO）が新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行（パンデミック）宣言をしてから3年目となります。現状では、世界の感染者数は5億人を超え、600万人以上の死者が出ています。しかし、ワクチンや治療薬の開発が進み、COVID-19の治療や予防の選択肢が増えてきています。最近では、国産のワクチンも承認されましたが、これまでのワクチンはメッセンジャーRNAワクチンであるのに対して、こちらは不活化ワクチンの一種である組み換えタンパクワクチンであり、副反応が少ないというデータがあります。副反応が気になり接種を控えていた方には朗報かもしれません。さらに、高齢者や持病のある方を対象に4回目のワクチン接種も始まっています。WHOのテドロス事務局長は我々全員が一つとなり協力することでパンデミックを収束できると訴えています。COVID-19パンデミックを終わらせるために、屋外で距離が取れる場合にマスクを外すなど暑さにも注意しつつ、感染予防対策を上手に続けていくことが求められています。

帯状ヘルペス検査を院内導入しました。

臨床検査技師長　小原 伸之

帯状ヘルペスは水疱瘡（みずぼうそう）ウイルスが原因で起こります。

日本人の多くは小児期に水疱瘡に感染しており完治していると考えている方が多いと思います。

しかし、日本人成人の9割以上ではこのウイルスが体内の神経節に潜伏しています。そして、加齢や疲労、ストレス、糖尿病、がん等々で免疫力が低下すると潜伏していたウイルスが活性化して帯状ヘルペスを発症します。（50歳以上で発症率は高くなり、80歳までに約3人に1人が帯状疱疹を発症するといわれています。）症状は神経に沿って痛みを伴う赤い斑点と水ぶくれが帯状に生じ、ピリピリと刺すような痛みで夜も眠れなくなる場合もあります。ただし、症状だけでは他の皮膚疾患と鑑別困難な場合があります。今回、当院では帯状ヘルペスを診断するため水痘・帯状疱疹ウイルス抗原検査（イムノクロマト法）を導入いたしました。ピリピリやチクチクとした痛みを伴う肋骨に沿った発疹や顔面（特に目の周り）に発疹がある方は帯状ヘルペスを疑って検査を受けてみてはいかがでしょうか？

独立行政法人
国立病院機構 あわら病院
福井県あわら市北潟238-1
TEL.0776-79-1211（代表）FAX.0776-79-1249
〈地域医療連携室〉FAX.0776-79-1261
URL http://www.awara-hosp.jp/

交通のご案内

えちぜん鉄道「あわら湯のまち」駅より（約5km）　乗合タクシー［事前に登録が必要です］
JR北陸本線「芦原温泉」駅より（約10km）　乗合タクシー［事前に登録が必要です］

※乗合タクシーを利用するためには事前に登録が必要です。
乗合タクシー（デマンド交通）は、お電話一本で、停留所から目的地の近くの停留所まで直接行けるシステムです。

《お問い合わせ先》あわら市役所　生活環境課　生活グループ　0776-73-8017